

農業土木を 支えてきた人々

徳川義直と六人衆

— 入鹿池の築造と木津用水の開削 —

伊藤 四郎*

I. 徳川義直

義直は、徳川家康の第九子として、関ヶ原の戦い後まもない慶長5年(1600)に大阪で生まれた。幼少のころは、母相応院とともに家康にしたがい駿府に住み、相応院の妹婿山下氏勝に養育された。慶長8年(1603)に甲府25万石に封ぜられたが、幼少のため甲府城代平岩親吉が6万3,000石を与えられ国政を代行していた。やがて、清洲城主松平忠吉(徳川2代将軍秀忠の弟、義直の異母兄)の死後をうけついで、慶長12年(1607)には尾張国(愛知県の西部地方)の領主となった。平岩親吉は犬山城(愛知県犬山市にあり国宝に指定されている)3万石を加増され、清洲城に住んで国政を代行していた。家康はさらに成瀬正成(後に犬山城主となる)と竹腰正信をつけて尾張藩の家臣とし、江戸幕府の直臣に準じた待遇をあたえた。

義直は、元和元年(1615)の大阪夏の陣に参加し、武功をあげ、信濃の木曾山と美濃3万石の地を与えられた。翌元和2年4月17日に家康がなくなり、母相応院とともに駿府から尾張に入り、名古屋城主として自から国政を担当した。義直は、初代の尾張藩主として実績をあげ、尾張藩250年の繁栄の基礎をつくった。

徳川時代の産業の基盤は農業であったので、各藩は農業の振興に力を入れ、農業用水の開発や農地の造成など重農政策を積極的にすすめた。尾張藩では、慶長14年(1609)葉栗郡大野村(一宮市)に家康の直臣伊奈忠次の計画により、木曾川から取水する大野坝(頭首工、寛永5年(1628)に宮田に移し宮田用水となる)や、元和5年(1619)に般若村(江南市)に般若用水、慶安元年(1648)に木津村(犬山市)に木津用水などをつぎつぎに開削するとともに、あわせて新田開発を行った。ま

た、寛永5年(1628)には木曾川から導水できない丘陵地を灌漑するために入鹿池築造計画をたて、寛永10年(1633)に完成した。入鹿池の築造と木津用水開削の大事業は尾張藩の初代藩主徳川義直のけい眼と江崎善左衛門了也を代表とする六人衆の功績によるものである。ここにその概要を紹介する。

II. 入鹿池

入鹿池は、愛知県犬山市の東部・池野地内にあり、岐阜県可児郡の一部を含む犬山市東部の山地34.4km²を流域とする満水面積166ha、貯水量15,183,000m³、周囲約16km、堤高25.7m、堤長724.1mの規模をもつ我が国屈指の農業用溜池である。

池の西畔には、明治時代の貴重な建築物や資料を永久に保存するために、昭和40年3月に開村した明治村があり、100haの広大な丘陵地帯に重要文化財8棟をはじめ50余の由緒ある建物が当時のまま再現されている。

また池の堤塘には茶店が並び、春は桜が咲き、夏はボートやヨットが浮び、秋から冬にかけては「ワカサギ」や「ブラックバス」の釣人でにぎわい四季おりおりの美しい風情をただよわせている。

この池は、今から352年前の寛永5年(1628)に小牧村(小牧市)の江崎善左衛門了也を筆頭に上未村(小牧市)の落合新八郎宗親、同村鈴木久兵衛、村中村(小牧市)の丹羽又兵衛、外坪村(丹羽郡大口町)の舟橋仁左衛門、桑田村(犬山市)の鈴木作右衛門の、いわゆる入鹿六人衆が発起人となり計画を樹て、時の犬山城主成瀬正成(尾張藩の家臣)を通じて藩主義直に築堤の請願をしたのがはじまりである。義直は遊猟に名を借りて実地調査を行い藩の事業として六人衆の計画を進めることに決定した。寛永9年(1632)に工事を開始し、同10年2月に築堤を完了した。堤は長さ96間(約175m)、根敷

* 愛知県一宮農地開発事務所(いとう しろう)

(堤塘敷幅) 75間(約 136 m), 直高14間 3尺(約 27 m), 馬踏(堤塘天端幅) 3間(約 5.5 m), 外法38間(約 69 m) となっているので, 外法勾配は 2 割 4 分, 内法勾配は 2 割 5 分で現在の設計基準に合致している。また盛土量は 33万3,000 m³ のぼう大な量になっている。堤体用土の土取場は尾張富士の裾野から運びだしたとしているので現在の明治村のあるあたりで, 運搬距離は 1 km 程度になる。この大事業を人力によって, わずか半年という短期間で完成させたことは驚異であり, 尾張 100 万石の経済力を背景に藩主義直の英断と入鹿六人衆の労苦のたまものである。

入鹿池は, 当時160戸を数え, 石高(米の生産量) 510 石(76.5 t) あった入鹿村を湖底に沈めてできたものである。入鹿村は, 北は今井山, 北東は八曾山, 東南は大山, 内津山, 西南は本宮山, 西は尾張富士に囲まれた盆地で, 成沢川, 五条川, 郷川などの河川が流れ込み合流して村の南方の銚子口と呼ばれる出口から鞍ヶ淵という溪谷を通して五条川へ流下していた。この銚子口をせきとめて池にしたものである。

入鹿村の住民は藩の命令により移転することになった。住民は移転料として 1 人当り米 1 俵(60 kg) と原野を与えられ移住した。前原新田, 奥入鹿新田, 神野入鹿新田などが移住先で現在も地名が残っている。前原新田への移住者は湖底に沈む村から福昌寺(1508年, 独秀禅師創建)や天道宮(後に神明社と合体して天道宮神明社となる)の社殿・楼門を移築した。天道宮神明社の楼門は県の指定文化財になっており今も現存している。

入鹿村の住民の移住が終った寛永 9 年(1632)に築堤工事が開始され, 着工後わずか半年で延長 96 間(約 175 m, 俗に百間堤と呼ばれている)の堤塘ができた。堤塘の最後の締切りは流水が速く困難をきわめた。このため築堤技術の進んでいる河内国(大阪府)から甚九郎という土工の巧者を呼びよせて工事にあたせた。甚九郎は堤塘の最後の締切りを「棚築き」という独特の工法で流水をせきとめ築堤を完成させた。

棚築き工法というのは締切部分をできるだけ狭くなるように盛土し, 松の木を渡して橋をつくり, その上に枯枝を敷き詰め, さらにその上に土を積上げ, 下から火をつけて松の木・枯枝を焼き一挙に土を落して締切り盛土をするものである。この百間堤を「河内屋堤」と呼び甚九郎の功をたたえている。

坝(取水樋)の工事は尾張一宮(一宮市)の大工原田与右衛門と原田平四郎が構築した。木曾の檜の厚板で樋管をつくり, 堤塘の東下から神尾部落の現在元坝と呼んでいる所へ通した。底樋の規模は寛文 2 年(1662)の修

理の時の記録によれば板の厚さ 1 尺(約 33 cm), 長さ 58 間(約 105 m), 樋の内側の高さ 5 尺 2 寸(1.6 m), 横幅 1 丈 6 寸(3.2 m) という大きなものである。斜樋は長さ 18 間(32.7 m), 高さ 6 尺(1.8 m), 幅 2 間(3.6 m) で取水孔が 13 個あり蓋がついている。池の水位が低いときに, 斜樋の蓋を開けて水を貯え, 灌漑期の水の必要な時は久保一色(小牧市)にある水役所の指示で, 扠守の指揮のもとに, 神尾部落の人が総出で, 1 人が水中に潜り, 蓋に綱をつけると「ヨイトマイタ」の掛声でまんりきを回し蓋を開けて水を通した。一度蓋を開くとそこまで水位が下るまでは水は出づなして蓋を開けたり閉めたりして水量を調節することはできなかった。

満水位は昔から 6 間 3 尺(約 11.8 m) 満水といっているので底樋から 11.8 m が満水位で, 死水が 4 間(約 7.3 m) あったので一番深い所で 19.1 m の水深があったことになる。6 間岩という巨岩が池の中にあるが水深が 10 間の時に頭を出し, この時の有効水深が 6 間であるために 6 間岩と呼ばれている。入鹿池の底は坝をつかった堤塘の東の方が高く, 西の方の百間堤の方が低いために死水ができたが, 明治 39 年(1906)の樋管改築で今までの坝を小さくして神尾部落 8 ha のみに灌漑し, 本坝は西の方に移し死水も利用できるようにした。

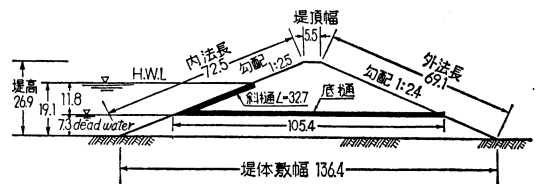


図-1 築堤時の百間堤の断面(想定図), 堤体延長 174.5 m, 樋管は東堤に設置

入鹿池の完成により用水の確保ができたので六人衆は寛永 10 年(1633)の春から入鹿筋筋の原野の開墾にとりかかった。翌寛永 11 年 10 月に水奉行鳥井新兵衛と江坂清左衛門の名前で, 江崎善左衛門, 落合新八郎, 鈴木作右衛門の 3 名にあてて「今度できた入鹿池の水路筋にいる者で, 新田をつかった者には, 3 年間無税・諸役は免除するから新田をつくるように」という通達を出した。新田をつかった者は, 最初の 3 年間は無税, 次の 3 年間は収穫量の 2 割, さらにその次の 3 年間は 3 割, 10 年目からは一般と同じ 4 割にするということである。当時の年貢(租税)は「四公六民・五公五民」といわれ, その年々の豊凶によって 4 割ないし 5 割の税を納めていたので藩がいかに開田に力を入れていたかがうかがわれる。また寛永 12 年(1635) 3 月には「今度入鹿に溜池ができた

ので、領分中の者であろうと他国・他領の者であろうと、また、どんな重罪を犯したものであっても、その罪を免除するから新田の開墾を希望する者は申し出てくるように」という高札を立てて農民の吸収につとめた。一方、当時尾張藩は欠落(逃亡)、転職を禁止し厳重に取締っていた。

入鹿池の築造、用水の開削、新田の開墾により、丹羽郡(犬山市の南部、扶桑町、大口町の一部)と春日井郡(小牧市の一部)にわたり800余町歩(800 ha)の新田が造成され、総石高6,838石(1,026 t)となった。六人衆は、入鹿池の築造と新田開墾の功績により、藩主義直から、小牧原新田、又助新田、河内屋新田の中で新田頭として、石高10石(1,500 kg)の免租(無税)地を与えられた。

入鹿池は、その後おおむね30年ごとに斜樋の伏替えが行われ、堤塘も補強されているが、築堤後235年たった明治元年(1868)5月14日の未明、河内屋堤が決壊し、被害は123カ村に及び流失家屋807戸、浸水家屋1,170戸、死者941人、負傷者1,471人、流失耕地8,400 haに及ぶ大災害が発生した。尾張藩の手でただちに災害復旧工事が行われ、堤体は再構築され、流失耕地は復元した。明治15年に河内屋堤の西の岩場を開削して放水路を完成した。放水路の延長は154間(約280 m)、深さ15間(約27.3 m)、底幅3間(約5.5 m)で、池の水深が10間(約18 m)になると放水路から流れできるようにした。その後も数次にわたり補強工事をしたが、昭和36年6月の豪雨で中堤(河内屋堤の東側)の外法が200 mにわたり、地すべりがおき、堤体3カ所にパイピングを起こした。このため昭和37年から46年にかけて、県営大規模老朽溜池事業で改修し、現在の姿になった。

III. 木津用水

江崎善左衛門了也、落合徳右衛門頼親(落合新八郎宗親の子)、鈴木久三郎(鈴木久兵衛の子)、丹羽又兵衛、船橋仁左衛門の5人は木曾川の本堤、丹羽郡犬山町大字木津地内(犬山市木津)に坝をつくり、尾張中東部に用水路を開削し、丹羽・春日井両郡の灌漑計画を樹て、藩主義直に請願した。義直は藩吏取田才兵衛に実地調査をさせ、藩の事業として取上げた。慶安元年(1648)に着工し、同3年(1650)に完成した。この坝を東元坝といい、その規模は長さ30間(約55 m)、横幅2間(約3.6 m)、高さ1間(約1.8 m)のものである。入鹿池水と合せて約5,000 haの農地が灌漑できるようになった。さらに寛文4年(1664)には、東春日井郡を灌漑するために新木津用水を開削した。このため東元坝だけでは水量が不足するため、さらに西元坝を築造した。長さは24間(約

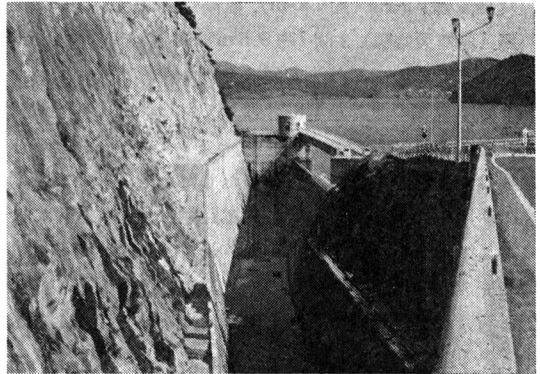


写真-1 入鹿池の余水吐

44 m)で横幅、高さは東元坝と同じであり両元坝とも木造であった。坝はおおむね50年ごとに伏替えられてきたが明治24年(1891)の尾張大震災により破壊した。このため同25年には木造をやめて煉瓦造りに改良した。その後数次にわたり改修を重ねてきたが、木曾川の河床底下や流心の変化により取水が著しく困難になった。このため昭和32年に国営濃尾用水事業が開始され、犬山城直下の木曾川に犬山頭首工を築造して宮田、木津、羽島の3用水を合口するとともに、幹線水路を改修し現在の姿になっている。

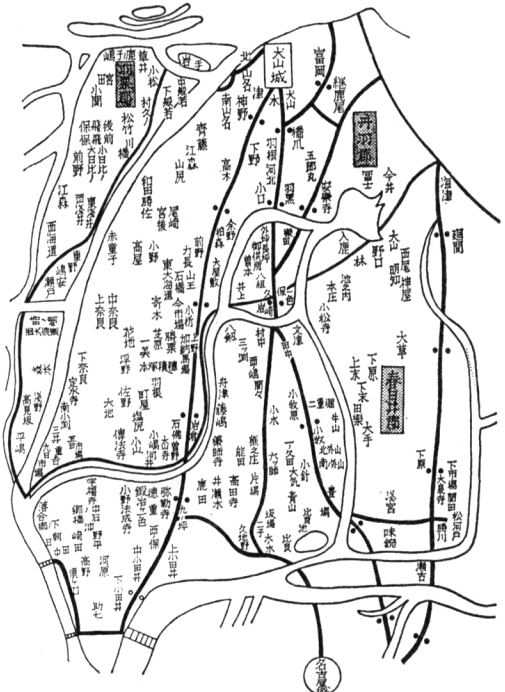


図-2 尾濃両国の図

IV. 六人衆

入鹿池の築造と木津用水開削の大事業に功績のあった六人衆についてその生いたちなどを紹介する。

江崎善左衛門了也の父善左衛門宗度は織田信秀の家臣で尾張国知多郡大高村（名古屋市緑区大高町）の生れである。信秀の軍に従い小牧山に陣を張っていたが信秀没後は信長の命により小牧村の守備に任じられていた。天正12年（1584）3月の小牧の役には徳川方につき、関ヶ原の戦いには徳川勢のために軍功をたてた。義直が尾張に封ぜられると、義直の命により名古屋から中仙道に通じる名犬街道を開設し、小牧、善師野、土田等の宿駅を開き地方開発に尽くした。義直の知遇を受け、寛永4年（1627）11月13日に病没した。了也は宗度の子で文禄2年（1593）5月5日小牧村に生れ、幼名を新四郎といった。寛永元年（1624）に父の業を継いだ。戦乱はおさまり、天下太平の世であった。寛永5年（1628）に了也は落合新八郎宗親とともに入鹿六人衆の中心となり、入鹿池の築造計画に参加した。入鹿池竣工後の寛永12年には91村の管理者を命じられた。その後慶安元年（1648）には六人衆の落合徳右衛門頼親等と木津用水の開削の大工事に参加した。この時了也は55才であった。延宝3年（1675）82才で病没した。

落合新八郎宗親は上未村の城主落合将監藤原安親の孫である。安親ははじめ、清洲城主織田信長に仕え、小牧山合戦の時は羽柴秀吉の配下として上未砦を守備した名将であったが、大阪城が落城し、豊臣家滅亡の後には不遇の身となり、地方豪族として帰農した。

安親には、光親、信親、親伴、平兵衛の四子があって、嫡子光親の長男が落合新八郎宗親で、やがて小牧原新田に移住して、開拓事業につくし落合家の始祖となったのである。光親兄弟四人は全部戦死している。宗親は、祖父安親や父光親が豊臣家に仕えた関係から、豊臣秀次に仕えていたが、秀次が文禄4年（1595）に高野山で自刃してから後は、関ヶ原の決戦後まもなく大阪落城。世は徳川の治世となり、不遇を忍んで上未村に帰農した落人である。

宗親は江崎善左衛門了也とともに、入鹿池創築の主唱者であり、中心人物として活躍した。後に藩主義直に功績をたたえられ、苗字帯刀の殊遇を与えられた。入鹿池完成の寛永10年から19年後の承応元年（1652）77才で世を去った。宗親には小八郎と六右衛門の二子があり、小八郎が家名をつぎ、落合徳右衛門頼親と名乗り、父宗親とともに小牧原新田に移住し、開墾事業に一生を捧げ

た。慶安元年の木津用水の開削の大事業には二代目の徳右衛門頼親が中心となって計画を樹て藩主に請願した。この時父宗親は73才の高齢であった。藩主義直が地方民情の視察の折りに小牧御殿において頼親父子二代の開拓の功をたたえた。

鈴木久兵衛は丹羽長秀の家臣鈴木彦九郎の後裔として上未村に生れた。久兵衛は六人衆に加わり、入鹿池創築の大事業に参加した。久兵衛には久三郎と新左衛門の二子があり、久三郎が家名を継ぎ河内屋新田に移住し開墾事業に従事した。木津用水開削の大事業には二代目の久三郎が主唱者に加わり、後年藩主義直から小牧御殿において、父子二代の功をたたえられ苗字帯刀を許された。

丹羽又兵衛は村中村の住人で代々豪農で知られた素封家である。六人衆に加わり入鹿池創築に参加し、完成するとともに自から村中原新田の開墾に従事した。木津用水開削の大事業にも加わり、後年藩主義直から小牧御殿において功をたたえられ苗字帯刀を許された。

船橋仁左衛門の遠祖船橋文平は小口城主織田広近に仕え、永禄4年（1563）に織田家を去り外坪村の住人となり、寛永3年（1626）に河内屋新田に移住した。文平の末孫が仁左衛門で六人衆に加わり入鹿池創築に参加した。木津用水開削にも加わり、後年藩主義直から小牧御殿において、功をたたえられ苗字帯刀を許された。

鈴木作右衛門は桑田村の豪農で六人衆に加わり入鹿池創築に参加し、義直より殊遇を受けその功績を賞せられた。木津用水の開削には六人衆のうち鈴木作右衛門だけが加わっていないが、高齢であったか、または地域的な関係から参加しなかったのではないかといわれている。

V. おわりに

入鹿池の築堤を寛永10年に完成し、木津用水の開削を慶安3年に竣工した当時の水利の調整、施設の維持管理は尾張藩が統轄し、圀奉行や小牧代官所の支配下に置かれていた。直轄管理する水役所は寛文12年（1672）に現在の小牧市久保一色に設置され、用水配分や樋門の開閉を指示していた。灌漑期間中は圀奉行の役人1名と小牧代官所の役人1名が常駐し、配水の主権を握っていた。農民側は関係村から総代13名を選出し、民意を上申していた。

現在、入鹿池は入鹿用水土地改良区が管理し、受益面積941ha、組合員数3,531名になっている。また木津用水は木津用水土地改良区が管理し、受益面積3,475ha、組合員数12,767名になっている。

[1981. 3. 10. 受稿]